

■ リスク選好ムードが強まるなか豪ドルの行方がますます気になる

昨日（27日）の米株市場で、NYダウ平均は25500ドル台に乗せる動きとなった。その結果、3月9日に開けた「窓」を埋めたうえ、2月高値から3月安値までの下げに対する61.8%戻しの水準（25230ドル）をも上抜けることとなった。

加えて、一目均衡表（日足）の運行線も「雲」を上抜けてきており、足下で複数の強気シグナルが出揃う格好となっている。ただ、同時にRSIやストキャスティクスなどオシレーター系の指標が目先の高値警戒シグナルを発し始めている点には一定の注意を要する。

依然、経済活動再開に伴う景気回復とワクチン開発への大きな期待が株式相場をけん引する格好となっており、市場のリスク選好ムードは日増しに強まってきている。

新型コロナウイルスワクチンの開発について、先週は米モデルナ社の臨床試験結果が話題に挙がっていたが、今週は米ノババックスが臨床試験を開始したことが市場で好感されている。相前後して、英アストラゼネカや中国のカンシノ・バイオロジクス、日本のアンジェス、タカラバイオなどによるワクチン開発の進捗状況なども次々に伝わっており、いずれかのワクチンが年内にも出回り始めるとの期待が市場で盛り上がるのも道理ではある。

むろん、ウイルス感染の第2波に対する警戒は怠れず、実際に世界の一部地域ではその兆候が見え隠れしている。いまだ中南米などで感染が急拡大していることも事実であるし、わが国でも緊急事態宣言が全面解除となった後の感染状況がどうなるかはまだ見えてこない。

本日（28日）閉幕する中国の全国人民代表大会（全人代）では、反体制活動を禁じる「香港国家安全法」の制定方針・骨格が採択される見込み。これに対してトランプ米政権が対中制裁を科すことになるのは必至であり、市場には第2次米中貿易戦争が勃発する可能性を危惧するムードも当然ある。

またしても米中による関税合戦が復活するとなれば、足下で必死に立て直しを図る米国経済にとっても相応のダメージとなりかねず、そのこともあって市場には「米マイナス金利導入観測」がなおも燃える。パウエルFRB議長は、ことあるごとに否定的な見解を繰り返しているが、現実的に市場でドルの上値を押さえ一因となっていることも事実と言えよう。

ただ、トランプ米大統領が中国に対して強硬姿勢でいられるのは、足下の米株価がすこぶる堅調に推移しているが故であるということも忘れてはならない。仮に今後、米中対立が一段と先鋭化し、それを嫌気して株価が大きく値を下げる展開となれば、過去にもそうであったようにトランプ氏は再び中国に対して歩み寄る姿勢を露わにする可能性が高いと見られる。

中国指導部としても11月に大統領選を控えたトランプ氏が置かれている立場は重々承知だろうし、ここで両国関係を後戻りできない状態にまで追い込むことは得策でない、それほど焦って動く必要もないということぐらいは理解しているはずであろう。

結果、米政権による対中制裁が形式的なものに留まるとするならば、世界経済はウィズ・コロナを基本としながら、着実に復活の道を辿って行くこととなる。そうならば、前回更新分の本欄でも触れた豪ドルの今後の行方がますます気になってくる。

既知のとおり、豪ドルは世界経済全体に漂うムードや原油価格の変動などに左右されやすい通貨として知られる。かつてのような金利の魅力は失われているが、今後世界がコロナ禍のダメージから一歩一歩立ち直って行くとするなら、それは豪ドルの価値の再評価にもつながろう。

足下では豪ドル/円が重要な節目の一つと考えられる70円処を上抜け、同時に一目均衡表（日足）の運行線が日足「雲」を上抜けてきている。加えて、足下では21日移動平均線と89日移動平均線のゴールデンクロス（GC）が示現しており、今後しばらくは89日移動平均線が上向きに転じてくるかどうかを見定めておきたい。

豪ドル/円の上値余地が一段と拡がれば、それはドル/円やクロス円全般にとっても一つの強気材料となり得る。ことにドル/円にとっては、長らく続いている狭いレンジのみみ合い圏から脱出するための良いきっかけとなる。 (05月28日 10:15)